

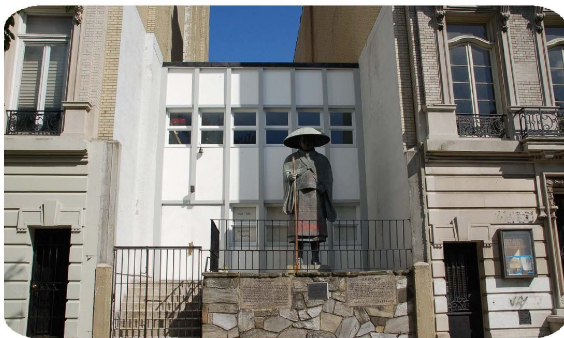


あの夏の朝、八月六日、丘に立つ親鸞像は遮るもののない原爆の火を真正面から浴び、ほとんど一瞬にして失われた十四万人という子供たちや老人、女性、兵士や市民の「いのち」とともに真っ赤に「鉄さび」のように焼けこげた。周囲にあった民家や草木も、直後に炎を上げて燃え上がった、という。銅像は胸から下が鉄さびのように赤くなっても「毅然として」丘に立ち続けた。

…「被爆の親鸞像」と呼ばれた。

それから十年後の昭和三十年九月、親鸞像は米国・ニューヨークに渡る。「ノーモアヒロシマズ——いま平和の念願にみちみちた広島を離れてニューヨークに渡り、新たな平和の使節としてハドソン河畔で世界の人々に平和の願いを訴える」「米国で平和説法」当時の新聞の見出しや前文はそう報じている。親鸞像は国連本部があるニューヨーク・マンハッタンのハドソン河畔の浄土真宗本願寺派ニューヨーク仏教会の前庭に建てられたのだった。

『親鸞 越後の風景』内藤章 著 より



私たち浄土真宗の者にとって馴染みの深い親鸞聖人像。笠をかぶり杖をつく姿は、お念仏を一人でも多くの方に届けるため、雪深い中を歩く様子にも見受けられます。

その聖人像がニューヨークにもあったことをご存知でしたか？ 関西の篤志家が建立し、広島市の丘の上で被爆した像は、今もその下半分に原爆で焼けた赤い跡が残っています。

聖人は80歳を過ぎてから弟子に送った手紙の中で、「**世のなか安穩なれ 仏法ひろまれ**」と語られています。「安穩」とは、仏典にある「シャンティ」という言葉が中国に渡った時の翻訳で、その他にも「寂靜」そして「平和」と訳されました。

ご自身の往生（命終えて浄土に生まれること）を心もとなく思われる人は、まず我が身の往生のことをお考えになってお念仏申されるのがよいでしょう。ご自身の往生は確かであると思われる人は、阿弥陀さまの御恩を思うにつけても、**御恩報謝のためにお念仏を心から称え、世の中が平和であるように、仏法が広まるようにとお考えになるのがよいと思われます。よくよくご思案ください。このほかに、特別の心づかいが必要であるとは思われません。**

親鸞聖人のお手紙 より

平和がどれほどかけがえのないことかを知っていながら、未だ実現できない私たち。親鸞聖人の静かなまなざしが「本当に大切にしなければならないものは何か？」と問いかけているような気が致します。ある先生が言っていました。「平和を考えることは、いかに生きるかを考えることだ」と。



慧日山 真光寺